

1 次の二つの文章A・Bを読んで、あとの問題に答えなさい。

(文章A)

3人の息子たちが小学校や幼稚園にいた頃、我が家には発見ノートというものがあつた。子どもたちが生活の中で何か新しいことに気付くと、まず私に報告する。私はやや大げさに褒めあげ、ついで「発見」の斬新さに応じて、「大発見」「中発見」「小発見」と皆に聞こえるような大声で査定し、表彰する。それを発見者がノートに記録するのである。

息子たちはこぞって私の所へ走って来て「パパ、発見したよ。」と言う。「言ってみろ。」「ガソリンスタンドはたいてい道路の角にあるよ。」「なるほど、それは面白い、ショーハッケン。」という具合である。発見の仕方は三者三様で、じっと辺りを観察する長男、手当たり次第に物をつかんで実験する次男、予測してから実験する三男と分かれていた。私も時折「発見」をした。そんな時は公平のため、息子たちが等級を判定することになっていた。息子たちと風呂につかっている時のことだった。「パパ、今、一つ発見したよ。」

「ナニ。」「湯船の中のオナラは臭い。」

息子たちは「ナインダそんなの。」とあきれたように5秒ほど笑っていたが、突然表情を堅くして唇をすっかり閉ざすと、ウメキ声とともに風呂から飛び出した。「風呂の中では、ガスがアブクの中に閉じこめられ、拡散しないまま鼻元で炸裂するからだ。」とガラス戸越しに科学教育をしたが、聞いてもらえなかった。

この発見の等級は、笑い転げていた女房の絞り出すような「ダイハッケン」で決定した。息子たちの「ショーハッケン」の連呼も、女房の的確な判断の前には空しかった。

(「藤原正彦の遠めがね・虫めがね」平成十四年六月八日朝日新聞)

○ことばの説明

- ① 斬新さ……思いつきが新しくてめずらしい様子
- ② 査定……(金額・等級などを)調べて決定すること
- ③ 炸裂……爆発して飛び散ること

(文章B)

高1になった末っ子のサブが、台所で透明のティーポットを手に、中を一心に見つめている。また何か発見したな、といやな予感を持ちながら新聞を読んでいると、しばらくして食堂に来て、案の定こう言った。

「発見したよ。ポットの湯を水平にぐるぐる回転させると、紅茶の葉っぱは外側に行くけど、回すのをやめると、数秒後には中心に寄り集まってくるよ。」

いやな予感と言ったのは、息子たちが何かを発見するたびに、良心と誠意の人である私は、科学的に説明する義務を胸いっぱいに感じてしまうからである。そしてたいいてい説明できないからである。

息子たちも小学生の頃は、「パパ、それでも本当に理学博士なの。」などと私をからかったが、最近ではまったく期待していないのか何も言わない。ほめてもらいたいから発見の報告だけはする。三人息子が高校生や大学生となった今でも、断固私はほめる。

「初めに葉が外に向うのは遠心力が働くからだ。」と言うと、「問題は、そのあと中心に向かうのがなぜかだよ。」とサブは生意気を言う

問題一 文章A・Bは新聞に載っていた記事ですが、内容にふさわしい見出しを、それぞれ十五字以内で書きなさい。

問題二 あなたなら文章A・Bを通じて、「大発見」について、その判定の基準をどのように決めますか。また、あなたが「大発見」をするためには、日頃から、どのような心がけが大切だと思いますか。自分の体験例をあげ、五百字程度で書きなさい。(「、」や「。」、段落をかえた時の残りのマス目も字数に加えます。)

う。考える時間をかせぐに限ると、ポットを勢いよく回して机に置くと、確かにサブの言う通りになる。

何回やっても紅茶の葉は必ず吸い寄せられるように中心に集まる。しつこいほどに集まる。時々気まぐれを起こして、中心に集まらないでくれれば、私も晴れて重圧から解放されるのだが決してそうならない。

例外がないという点で科学は時に冷酷である。父親としての権威を容易に失墜させる、という点で無情でもある。

(「藤原正彦の遠めがね・虫めがね」平成十四年七月六日朝日新聞)

○ことばの説明

①遠心力……物が円を描いて回っている時、中心から遠ざかるうとする力

②失墜……信用などを失い落とすこと